

言われていることへの二つのアプローチ

—折衷的ミニマリズムと文脈主義—

三木那由他

1. はじめに

よく知られているように、Griceは「言われていることwhat is said」と「含みとされていることwhat is implicated」（「含みimplicature」）とを区別するよう提案している(Grice, 1975)。そしてこれはしばしば、発話において意味論が扱う範囲と語用論が扱う範囲との区別に対応するものだと捉えられてきた⁽¹⁾。

ところが現在では、この二分法がうまく当てはまらない事例が少なからず存在することが知られている。その結果、多くの論者が意味論と語用論の関係を捉えなおす必要性を訴えるようになってきている。そしてそうした論者はしばしば、言われていることという概念の修正を通じて、意味論と語用論のあり方を再考しようとしてきた。だがいまだにこの問題に関する意見の一致は見られず、いくつかの立場が形成されつつ論争が続けられている。

本稿で扱うBach、Recanatiもそうした状況に積極的に関わっている。BachはGriceの用いた概念を修正することで、純粋に意味論的な言われていることというものを擁護し、意味論独自の領域を保持しようとする⁽²⁾。これに対し、Recanatiは純粋に意味論的な言われていることという考えを退け、意味論に対する語用論の圧倒的な優越を主張する。

彼らがそれぞれ言われていること概念をどのように捉えているのか、そしてそれが意味論と語用論の関係に対するいかなる見方を導くのか、本稿ではこれらの問題を考察する。

2. 古典的ミニマリズム : Grice

上に挙げた二人について論じる前に、彼らの参加している論争の出発点に位置するGriceの理論を振り返っておく。

Griceにおける言われていること概念は、その内容が発話された表現の持つ意味論的な特徴のみから決定可能であり、しかもその真理条件的意味に一致するという性格を持つ。こうした見解をGriceがいかに提出し、それに対しいかなる反例が与えられたかを見ていく。

2.1 Griceの含みの理論

言われていることと含みとされていることとの区別については、具体例を見ることで容

易に直感的な理解が得られる。例えば「山田くんは図書室にいるよ」という発話において言われていることは、山田くんが発話の時点で図書室にいるということだ。これに対し、文脈次第でこの発話は山田くんが待ち合わせの時間を忘れているということを伝えることもできる。これは言われていることそのものではなく、それを発話することで言外に含みとされていることだとされる。これに類した具体例を援用しつつ、Grice は言われていることと含みとされていることという概念のより厳密な定式化を試みている(Grice, 1975)。

Griceによれば、言われていることという概念は「[話者が] 発話した言葉(文)の慣習的な意味と密接に関わる」(Grice, 1975, p. 25)。けれども文の単なる慣習的な意味³⁾(字義的な意味)と、その文の発話において言われていることとは明確に区別される。というのもGriceは言われていることの特定に必要な情報として、発話された文の慣習的な意味のほか①指示表現が指示する対象が何であるか、②その発話がいつなされたか、③(多義的な表現が用いられている場合)一つの表現に対して可能な複数の意味のうちいずれがその発話の場面で用いられているか、という事柄が特定されなければならないとしているからだ。つまり、「私は日本人だ」という文は私が発話しようとして別の人が発話しようと同じ慣習的な意味を持つが、それぞれの発話において言われていることは異なるということになる。それゆえ言われていることの特定には文脈情報が必要とされる。とはいえ、これは言われていることが意味論的な概念であることを必ずしも妨げるものではない。指示表現などは文脈から値を受け取らなければならないが、それがどのように値を受け取るかは話者の意図などとは無関係に、純粋に言語的に限定されているからだ。話者がどのような場面で、どのような意図を抱いていようと、「私は日本人だ」はその話者についての言明であり、それ以外のものではありえない。それゆえGriceは、言われていることは「発話の状況を知らなくとも」把握されうるとしている(Grice, 1975, p. 25)。

このように、Grice は言われていることを意味論的な要因のみから決定されうるものと捉えている。このことに加えて、Grice における言われていることという概念にはさらに際立った特徴がある。それは、言われていることは発話された文のその文脈における真理条件的内容と過不足なく一致するというものだ。Grice はこのことを明確に正当化してはいないが、こうした考えがGriceの議論の背景にあったということは、Griceの哲学的な目標の一つが、自然言語のある表現とそれに対応する形式言語の表現のあいだに意味上の差異はないと示すことであつたという点からも明らかだ(Grice, 1967a)。実際、Griceは例えば「pならば、q」と「p⇒q」について、それらによって言われていることは同じであり、それらの意味の違いと思われているものは発話における含みなのだと説明している(Grice, 1967b)。

これに対し、含みとされていることは、話者があることを言っているという事実を説明

するために話者が聞き手に伝えようとしていると想定される事柄だとされる。それゆえ、含みとされていることは、言語そのものというより、話者の意図に関する概念だと考えられ、その内容は発話文の真理条件的意味には収まらないものとなる。

言われていることは純粹に言語的な要因に関わり、含みとされていることは話者の意図という言語外的な要因に関わる、そう Grice は考えていた。このことから Grice によるこの両者の区別は、発話における意味論的な側面と語用論的な側面との区別に対応するものだとするのが一般的な解釈だ(cf. Chapman, 2005, C9)。そして Grice は単にこれらを区別しただけでなく、それらの相互関係を論じてもいる。

話者がある発話を行なったとする。Grice によれば、聞き手はまず発話された表現の意味論的な解釈をもとに、話者が言っていることを認識する。そしてそこで言われていることが何らかの理由で文脈にそぐわない場合(直前の発話と関係がないなど)、聞き手は話者がそれ以上の情報を含みとしていると想定することで、話者が伝えようとしている内容を解釈する。つまり、Grice は話者がその場面で伝えようとしている事柄の把握に至るまでの聞き手の認知プロセスを次のように捉えているのだ。

文の意味

↓ (意味論のプロセス)

言われていること

↓ (語用論のプロセス)

含みとされていること

それゆえ Grice の理論においては、含みの成立のためには、言われていることがあらかじめ確定していることが必要だということになる。

Grice による言われていることの特徴づけと、その背景にある意味論・語用論観をまとめてみよう。ここまで見てきたところでは、Grice の言われていることには大きく三つの特徴があった。第一に、言われていることは言語的な特徴のみによって決定される(特徴①)。第二に、それは発話された文の真理条件を内容とする(特徴②)。最後に、言われていることの内容が確定してはじめて、含みの成立が可能となる(特徴③)。こうしたことから、Grice が語用論と独立の意味論的な領域を認めており、文の真理条件の確定をそこに含めていたということ、さらに意味論のプロセスの出力が語用論のプロセスの入力となるという限りにおいて、語用論を意味論に依存するものと考えていたということは明らかだろう。

また、ここから Grice が思い描いていたコミュニケーション観も見えてくる。それによ

ると言語表現の意味は個々の文脈とは独立に成立しており、われわれは意味についての知識を共有することでコミュニケーションを行なっている。ときにわれわれの発話はその字義通りの意味を超えた働きをするのは、こうした知識の共有を前提としてのことなのだ。

これはわれわれの直感にかなり合致した見解と言ってよい。ところがここで問題が生じる。このコミュニケーション観（及び意味論・語用論観）と Grice 流の言われていることの特徴づけとは、切り離すことのできない関係にあった。しかし現在では、この言われていることの特徴づけに対する反例が少なからず存在すると知られている。そうした事例には少なくとも二つの種類がある。一つは言語外的な要因を参照しなければ真理条件が確定できない（特徴①と特徴②が矛盾する）文の例であり、もう一つは発話において含みが生じるための条件となる内容と意味論的に決定される内容が異なる（特徴①と特徴③が齟齬を来す）文の例だ。これらが Grice の枠組みに対する反例となることを順に見ていく。

2.2 Grice モデルへの反例

言語外的な要因の参照なしに真理条件が定まらない例として典型的に取り上げられるのは、次のような所有表現だ⁽⁴⁾。

(1) ジョンの本は机の上にある。

この文において、「ジョンの本」という表現は「ジョンと一定の関係 R を持つ本」を意味すると考えることができる。そしてここでの R がいかなる値を取るかは、話者がこの表現によって何を伝えようとしているかを考慮することなく決定できない。「ジョンの本」がジョンが書いた本であるのか、ジョンが持っている本であるのか、ジョンについての本なのか、ジョンが盗んだ本なのかなどといったことを確定しうるような言語的要因は、この文にはないからだ。

こうしたことから、言われていることが純粋に意味論的であり、しかも真理条件的であるということは必ずしも成り立たないと考えられる。上で挙げた例では、発話の真理条件の確定には話者の意図の推測という語用論的なプロセスが働いていた。それゆえ、言われていることが Grice の言うとおりの発話された文の真理条件と対応するのならば、それは語用論的な要因を含むものでなければならない。つまり先に挙げた特徴①と②が両立せず、Grice による言われていることの特徴づけはこのままではうまくいかないのだ。

次に、意味論的に確定される内容と、含みが生じるために確定されなければならない内容とが一致しない例を見る。下の例について考える。

(2) ビンはみな空っぽだ。

この文が、ある家で飲み会をした翌日、その家にまだ残っていた人物によって発話されたとしてみよう。文脈次第でその発話によって含みとされているのは、飲み会の参加者たちが酒をたくさん飲んだといったことになるだろう。さて、この含みが生じるためにこの文の発話が持っていなければならない内容は、問題の家にあるビンがすべて空だということだ。ところが、意味論的に確定されるこの文の内容はそうしたものではない。この文は字義的には、世界にあるすべてのビンが空だということの内容とするからだ。それゆえ、特徴①と③も調和せず、やはり Grice による言われていることの特徴づけは妥当ではない。

Grice のように、言われていることを意味論的にかつ真理条件的だと捉える立場は一般に「ミニマリズム minimalism」と呼ばれる（言われていることの確定に関与する文脈上の情報が「最小」という意味で）が、上のような例を鑑みると Grice の取るミニマリズムをそのままの形で維持するのは難しい。Grice による言われていること／含みとされていること二分法、それゆえ意味論／語用論の二分法には境界事例が存在するのだ。

こうした状況を受けて、Grice 的なミニマリズムを放棄し、言われていることという概念の修正によって反例に対処しようという立場がいくつか現れた⁽⁵⁾。その中でもとりわけ有力と目されるのは、Bach と Recanati の理論だ。Recanati は自らの立場を「文脈主義 contextualism」、Bach の立場を「折衷的見解 syncretic view」（本稿では「折衷的ミニマリズム」と呼ぶ）として対比する(Recanati, 2001, レカナティ, 2006)。彼らはそれぞれ言われていることという概念を独自の仕方で再考し、それにより意味論と語用論の関係を捉えなおそうとしている。以下では、このそれぞれの論者が言われていることをどのように考え、それがいかなる意味論・語用論観を導くのかを見ていく。

3. 折衷的ミニマリズム : Bach

Bach は上の例で見たような語用論的にしか真理条件が定められない文の事例の存在を認め、その上で言われていることの真理条件性を放棄してその純粋に意味論的な性質を保持しようとする。この修正の結果、Bach が提示する言われていることは Grice のそれとは大きく異なったものとなる。Bach によれば、言われていることは真理条件的である必要がなく、それゆえに必ずしも命題とはならず、前命題的なものであってもよい(Bach, 2001)。

こうした Bach の考えを支えるのは、Grice による言われていること／含みとされていること二分法は発話における意味を説明するには十分ではなく、Grice における言われてい

ることはさらに言われていることと「述べられていること what is stated」とに分けられなければならないという見解だ。発話文のその場面における真理条件は、言われていることではなく述べられていることにおいて表現されるとされ、それによって言われていることの純粋に意味論的な性質は保たれる。

Bach はこの言われていることと述べられていることとの区別に加えて、「暗意 implicature」という概念を導入する。これは発話において話者が暗黙 (implicit) の了解としている事柄であり、聞き手はこれを無意識のうちに読み取ることで、話者が発話において述べていることを認識する。

Bach の提示する典型的な例は次のようなものだ(Bach, 2001, pp.19-20)。

(3) ジャックとジルは [互いと] 婚約している。

(4) ジャックとジルは [旅行の] 準備ができています。

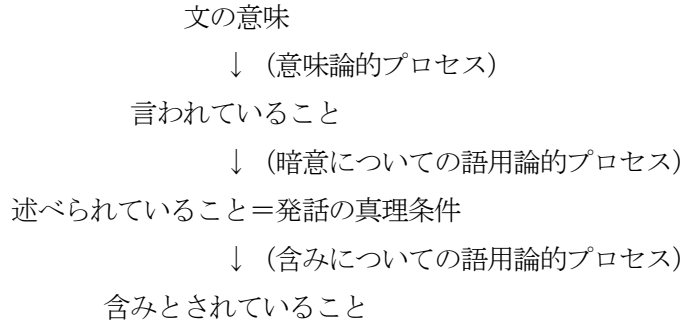
(3) で言われていることはジャックとジルが婚約しているということであり、これはそれぞれが誰か他の人と婚約している場合にも真となる。だがこの文の通常の発話ではジャックとジルが互いと婚約しているということが暗黙の前提とされ、この発話の聞き手もそれを了解している。それゆえ通常は、この文の発話はジャックとジルが互いと婚約している場合に、かつそのときにのみ真になるものだと認識される。この暗意は、例えば話者がこの発話に続けて「けれど互いとはではない」と付け加えることなどによって取り消し可能であり、それゆえに言われていることには含まれないと Bach は論じる。

Bach のよりラディカルな主張は (4) に現れる。(4) のような文は、「何に対する準備か」が確定しなければ真理条件が定められず、それゆえ完全な命題を表現していないという指摘がしばしばなされる⁶⁾。それゆえ (4) は [] 内が補われてはじめて十全な命題を表しうるのだが、Bach は [] の中身は暗意であり、十全な命題と言われているものは発話で述べられていることに当たると考える。それゆえそれから暗意を取り消した言われていることは十全な命題ではないことになるが、Bach はこの帰結を積極的に肯定し、言われていることは十全でない、前命題的なものになりうるとする。十全な命題は、言われていることが暗意によって補完されることで確定される。

もはや先の反例に Bach がいかに応答するかは明らかだろう。「ジョンの本」の例では、完全な命題は述べられていることのレベルで定まるのであって、問題の発話で言われていることはジョンと本の関係が完全には特定されていない不完全な命題だとなる。「ビン」の例では、発話において言われているのは世界のすべてのビンについてのことだが、暗意に

よって、問題の家にあるすべてのビンについてのみ何かが述べられていることとなる。

ここまでで見てきた Bach の考えを図式化すると次のようになる。



Bach によれば、言われていることは純粹に意味論的で個々の文脈情報とは無関係に成立する内容を持つがゆえに、コミュニケーションにおいて話者と聞き手の共通の基盤として働く。そしてたとえ言われていることが両者に意識されていない場合でも、それは無意識下において述べられていることの取りうる命題の範囲を限定するという形で、コミュニケーションに参与する。先の「ジョンの本」の例を取るなら、「ジョンの本」がジョンが書いた本なのかジョンの持っている本なのか、ジョンがなくした本なのかといったことは話者の意図と独立には定められない。しかしそれがともかくも何らかの一定範囲の関係を示していることはその語句に純粹に言語的に表されており、それゆえに言われていることに含まれている。従って「ジョンの本」によって指されている対象は、ジョンがたまたま見かけた本であるよりはジョンの持っている本である可能性が高いと理解するように、聞き手は文脈とは独立に方向付けられている。

Bach における言われていることは、語用論的にしか内容が決定できない表現が文に含まれる場合にも、その発話の内容がその文の字義の意味から極端に逸脱しないよう制限する働きをしている。そして同時に、その言われていることが個々の文脈や話者の意図から独立に成立し、会話の参加者が等しい権利を持ってアクセスしうる「意味論的事実 semantic fact」に関わるとすることで、コミュニケーションが可能となる基盤をも説明している。

こうした Bach の立場は、明らかに語用論からまったく独立した意味論の領域を認めるものだ。ただし、この意味論においては文と真理条件との関係は扱われず、それは語用論的な事柄とされる。Bach においては、意味論の圏内に含まれるのは、文がその取りうる真理条件の可能性をどのように制限するかという前真理条件的な範囲に限られる。

まとめておこう。Bach は言われていることの真理条件性を放棄し、その代わりに意味論

的な純粋性を確保しようとしている。そしてそれが発話において文が取りうる真理条件の可能性に制約を課し、かつ会話の参加者によって等しくアクセスされるものであると考えることで、そうした言われていることがコミュニケーションの成立に不可欠な役割を果たしていると論じる。こうした Bach の言われていること概念に基づくなら、意味論は独自の領域を保持するが、それが扱うのはもはや文と真理条件との関係ではなく、文が発話の文脈において与えられうる真理条件の可能性に対して持つ制限だということになる。こうして文の真理条件の確定は語用論の圏内に属することになるが、Grice の場合と同じく、語用論のプロセスが始まるためには意味論的内容が確定していなければならないとされており、その限りで意味論はより基礎的なものと見なされている。

この Bach の見解に対する批判は五節で行なう。まずはそれに先立って、Bach と対立する陣営に属す Recanati の議論を概観する。

4. 文脈主義 : Recanati

Recanati は Bach とは反対に、言葉の意味とされるものの徹底的に語用論的な性格を主張する。そしてそのために、Recanati は単なるミニマリズムのみならず、Bach 的な折衷的ミニマリズムに対しても激しい批判を展開している。Recanati の批判の眼目は、Bach の主張するような言われていることは不可能だと示すことにある。以下ではこうした Recanati による Bach 批判とあわせて、Recanati 自身の見解を見ていく。

折衷的ミニマリズムに対する Recanati のもっとも強力な議論は、Bach の言われていることでさえずで語用論のプロセスを前提としているというものだ(Recanati, 2001, レカナティ, 2006)。Bach の言われていることは、発話された表現の意味論的な解釈が文脈と独立に可能であることを前提としている。つまり表現の各部の内容が文脈と独立に決定可能であり、その内容をもとに表現に含まれる空隙（ジョンと本の関係、何の準備か）が語用論的に埋められていくものと考えられている。だが、果たしてそうした純粋な意味論的解釈というのは可能なのか、と Recanati は問う。

Recanati の挙げる例は「赤いペン」という単純なものだ(Recanati, 2001)。赤いペンとされるのは何か。ペンであり、赤いものだ。だが、ペンが赤いと見なされるのはどのような場合か。それは文脈によって異なる。キャップが赤い場合かもしれないし、インクが赤い場合かもしれないし、書かれた文字が赤い場合かもしれない。そして Recanati は、「赤いペン」のような極めて単純で基本的な表現でさえ、意味論的に内容を決定することができないのだから、同様のことはいたるところで起こりうると主張する。

先に取り上げた「ジョンの本」の例を見てみよう。「ジョンの本は机の上にある」は、言

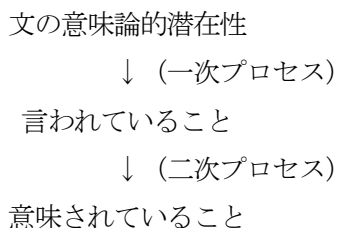
われていることにおいては完全な命題を表現せず、ジョンと本との間にある関係は語用論的プロセスによって補完されるというのが Bach の考えだった。これに従うと、「ジョンの本は机の上にある」において言われているのは、ジョンと一定の関係 R にある本がある机の上にあるということだ。そして R の補完とそれによる「ジョンの本」の指示対象の確定、さらに「机」の指示対象の確定を行なうことで、われわれは完全な命題に達することができる。ここでは、われわれが「本」、「机」といった表現の解釈を文脈と独立に行ないうるということが前提となっている。Recanati が疑問を突きつけるのはこの点だ。「本」は書物のみならず、文脈次第でパンフレットやメモ帳なども意味しうる。そしてそのいずれの仕方で用いられているかは、話者の意図によってしか定まらない。「机」についても同様だ。場合によっては、「机」で意味されているのは段ボール箱かもしれない。それゆえ、Bach の言われていることはすでに語用論的プロセスを前提としている。

この Recanati の議論に対し、それでも「本」がピンを意味する文脈といったものは考えがたく、あったとしても極めて例外的である以上、「本」の意味の確定には何かしら意味論的な制約が働いているのではないかという反論が可能かもしれない。Recanati はその主張を受け入れるだろう。問題は、それは Bach の主張するように文脈とは独立に成立している客観的な事柄なのだろうかということだ。確かに何らかの傾向とでも言うべきものは介在しているに違いない。だが「本」が適用されうる対象は予め固定されているわけではなく、あらゆる適用場面において常に新たな適用対象を見出すことが可能なのではないか。こうした考えから、Recanati は「意味論的潜在性 semantic potential」という概念を導入する。

Bezuidenhout の簡潔な解説を借用すると、ある表現の「意味論的潜在性は源状況 source-situation の集合として定義される」(Bezuidenhout, 2001, p. 116)。そしてある表現の源状況とは、これまでの経験においてその表現が正当に適用された状況を指す。このことから明らかのように、意味論的潜在性は各言語使用者に相対的なものであり、Bach における意味論的事実のような客観性を持ってはいない。また、意味論的潜在性は予め定まっているものでもない。まったく同じ状況というものが二つとない以上、ある表現を用いるには、過去に経験した状況との類似をもとに、話者はそのつど新たにその表現の適用の正当性を判断しなければならない。そしてそのたびにその表現に関わる源状況が追加され、意味論的潜在性は更新される。聞き手もまた、いかなる表現に対しても常に新たな状況の下で出会うことになる。そしてその表現に関してこれまで経験した状況との類似をもとに、話者の意図の解釈を通じてその場面でのその表現の内容を把握しようとする。こうした性質上、意味論的潜在性は文脈と完全に独立な純粋に意味論的なものではありえない。そこでもすでに語用論的情報が前提されているのだ。

以上のような議論をもとに、**Recanati** は言語使用と独立な純粋に意味論的な言われていることという概念を否定する。**Recanati** によると、それは単なる理論家による抽象物に過ぎず、実際の会話で機能しているものではない。とはいえ、言われていることという概念自体が放棄されているわけではない。そうではなく、言われていることは語用論的な概念として考えられるべきだと主張されている。つまり、**Bach** とは違い、**Recanati** は言われていることが純粋に意味論的だという考えを放棄し、それが語用論的だとすることで、その真理条件性を保とうとしているのだ。それゆえ、**Grice** による言われていること／含みとされていることの区別は維持されている。

Recanati は語用論的プロセスを二通りに区別する(レカナティ, 2006)。発話において言われていること(直感的真理条件)を認識する際に働く「一次プロセス primary process」と、言われていること(直感的真理条件)の理解をインプットにして含みの理解を実現する「二次プロセス secondary process」だ。話者がある発話を行なったとき、聞き手はその発話で用いられた表現に自分が結び付けている意味論的潜在性と文脈をもとに、その発話で言われていることを認識する(一次プロセス)。そしてその上で、さらなる語用論的プロセス(二次プロセス)によって含みを理解するとされる。図示すると次のようになる。



ここまでで見てきたように、**Recanati** は結局のところ、言葉の意味に関する諸側面は程度の差こそあれすべて語用論的なものだと考えている。それゆえ、意味論は根本的には語用論に基づくものであり、語用論こそより基礎的なものと見なされる。

5. **Bach** と **Recanati** の比較

Bach は **Grice** の言われていること概念から、その真理条件性を放棄することで純粋に意味論的な言われていることを保持しようとしていた。そしてそれが純粋に意味論的であるということが、コミュニケーションというものを説明するのに必要だとしていた。このことから、**Bach** は独立した意味論の領域を確保し、意味論と語用論を区別すべきだと考えていたことがわかった。

これに対し、**Recanati** は純粋に意味論的な言われていることなるものはありません、それゆえ言葉の意味に関しては、あらゆる側面が語用論的性質を持っていると主張している。ここから帰結するのは、語用論と独立の純粋な意味論などありえないということだった。

Bach の理論が持つ最大の利点は、コミュニケーションというものの成立が明快に説明できるという点にある。客観的に成立している意味論的事実を会話の参加者がそれぞれ把握することでコミュニケーションが成り立っているという **Bach** の見解は、われわれの直感的なコミュニケーション像にかなり近いものだろう。だが他方で、先の「ビン」の例のような全称文の関わる事例にこの理論が与える説明の妥当性には疑問も残る。ある子供が「僕、野菜みんな食べたよ」と発話したとしよう。ここで「僕、野菜みんな食べたよ」がこの子供が世界のすべての野菜を発話時より以前に食べたという内容を持つという意味論的事実は、コミュニケーションの成立に本当に関与しているのか。子供がこの意味論的事実を把握していないにもかかわらず、コミュニケーションが成立しているということはありえるのではないだろうか。だとすると、**Bach** の理論にはいくらかの修正が必要だろう。

それに対し **Recanati** の場合、そもそも発話された表現の純粋に意味論的な内容というものを認めないのだから、こうした問題は生じない。しかし **Recanati** の理論が、かなり異なる経験をしてきた人同士でも通常、コミュニケーションは大して滞らないということ、そして現に慣習の総体としての言語というものが何らかの意味で存在しているということといったわれわれの直感をうまく説明できるのかは明らかでない。

6. 結論

Grice の言われていること概念が直面した困難に対する二つのアプローチを見てきた。折衷的ミニマリズムを奉ずる **Bach** は、言われていることの真理条件性を捨て、言われていることが発話文の真理条件を表さず、それゆえ十全な命題とならない可能性を認めていた。そうすることで彼は、純粋に意味論的な領域を確保し、意味論と語用論の境界を守ろうとしていた。このような **Bach** の理論には、コミュニケーションの成立というものをわれわれの直感に見合った仕方で明快に説明するという利点があった。だがその一方で、全称文の発話の事例をうまく処理できない可能性が残されていた。

そうした **Bach** とは反対に、**Recanati** は意味論的解釈さえ語用論的プロセスを必要とするとして主張し、言葉の意味の諸側面はすべて語用論的であると論じた。そうした **Recanati** の見解は、意味論の基礎を語用論に求めるという立場を導くものだった。**Recanati** の理論では、全称文の事例が問題を引き起こすことはない。だがそれとともに、われわれが直感的に理解している言語のあり方を説明するという別の課題が生じることとなっていた。

最後に一言付け加える。BachもRecanatiも現時点では経験的データを重要視せず、頭で考えた事例を中心に考察を展開している。だが問題は人々の実際の言語運用に関わる。それゆえ、われわれはこの意味論・語用論問題を単に理論的に考察するのみではなく、経験的データとの整合性という点からも見ていくべきだろう。言語学的実験やGrice派語用論の他分野への応用⁽⁷⁾から得られる知見が、この論争を新たな局面に導くことが期待される。

註

- (1) 本稿では、表現の言語的特徴とその表現がいかなる特定の文脈からも独立に持つ内容との関係を扱う分野を意味論、特定の文脈における表現の用いられ方に関わる分野を語用論とする。
- (2) ここで「純粋に意味論的」というのは、話者の意図などの語用論的な事柄とは独立だということだ。本稿ではこれ以降もこの言葉をこうした意味で用いる。
- (3) ここでの「慣習的」とは「言語慣習的」ということであり、「儀礼的」、「常識的」といったことは意味しない。
- (4) 同様の例がRecanati(2001, p. 85)にも見られる。
- (5) 本稿では扱わないが、「ジョンの本」の例において語用論的なプロセスとされているものもその圏内に納めるような意味論のプロセスを構想し、反例自体を無効化しようというアプローチもある。Cappelen & Lepore(1997)を参照。
- (6) Bachを含め、多くの論者はある文が表す命題とはその文の真理条件だという考えを暗黙の前提として、こうした議論を行なっている。Chapmanはこの前提は決して自明ではなく、別の解釈も可能だと指摘している(Chapman, 2001)。
- (7) Ariel(2002)やBezuidenhout & Cutting(2002)は、レカナティの提示した聞き手の認知プロセスを実験的に確認しようとしている。また他分野への応用については、最近では含みの理論の人工知能研究への応用(Saygin & Cicekli, 2002)や、素朴な形ではあるが、経済学的実験への応用(Jones, 2007)といった例が見られる。

文献

- Ariel, M. (2002). 'Privileged Interactional Interpretations', *Journal of Pragmatics*, 34, 1003-1044.
- Bach, K. (2000). 'Quantification, Qualification and Context', *Mind & Language*, 15, 262-283.
- (2001). 'You Don't Say?', *Synthese*, 128, 15-44.
- Bezuidenhout, A. (2002). 'Truth-Conditional Pragmatics', *Philosophical Perspectives*, 16, 105-134.
- Bezuidenhout, A. & Cutting, J. C. (2002). 'Literal Meaning, Minimal Propositions, and Pragmatic Processing', *Journal of Pragmatics*, 34, 433-456.
- Capone, A. (2006). 'On Grice's Circle', *Journal of Pragmatics*, 38, 645-669.
- Cappelen, H. & Lepore, E. (1997). 'On an Alleged Connection between Indirect Speech and the Theory of Meaning', *Mind & Language*, 12, 278-296.
- Chapman, S. (2001). 'In Defence of a Code', *Journal of Pragmatics*, 33, 1553-1570.
- (2005). *Paul Grice: Philosopher and Linguist*, Houndmills: Palgrave Macmillan.
- Grice, P. (1967a). 'Prolegomena', in Grice(1989), 3-21.
- (1967b). 'Indicative Conditionals', in Grice(1989), 58-85.
- (1969). 'Utterer's Meaning and Intentions', in Grice(1989), 86-116.
- (1975). 'Logic and Conversation', in Grice(1989), 22-40.
- (1989). *Studies in the Way of Words*, Cambridge: Harvard University Press.
- Jones, M. K. (2007). 'A Gricean Analysis of Understanding in Economic Experiments', *Journal of Economic Methodology*, 14, 167-185.
- Recanati, F. (2001). 'What is Said', *Synthese*, 128, 75-91.
- レカナティ, F. (今井邦彦訳) (2006). 『言葉の意味とは何か』, 新曜社.
- Saygin, A. P. & Cicekli, I. (2002). 'Pragmatics in human-computer conversations', *Journal of Pragmatics*, 34, 227-258.